

【特集：マレーシアの2018年総選挙と政権交代】

特集にあたって

山本博之

2018年5月、マレーシアで第14回総選挙および州議会選挙が行われた。即日開票の結果、定数222の下院では、解散時に130議席を持っていた与党連合・国民戦線（Barisan Nasional: BN）が79議席まで大きく後退し、野党連合・希望連盟（Pakatan Harapan: PH）が113議席を得て、1957年のマラヤ連邦の独立から数えると61年目にしてマレーシアで初の政権交代が実現した。

本特集は、2018年総選挙の結果とその分析、およびこの総選挙と政権交代がマレーシア政治にもたらす意味について、鷺田任邦、篠崎香織、山本博之の3人の論考によって検討するものである。鷺田論文は、比較政治学の立場から、マレーシアでなぜ2018年に史上初の選挙による政権交代が起きたのかを論じる。篠崎論文と山本論文は、2018年総選挙がマレーシア政治に与えた影響を、それぞれペナン州における開発と地方政党およびサバ州における政党間の移籍を通じて検討する。この3つの論考に先立って、2018年総選挙と政権交代がマレーシアの現代政治史にとってどのような意義と重要性を持つかを整理する。

本特集は2018年10月21日に行われた日本マレーシア学会第27回研究大会シンポジウム「マレーシアの政権交代を考える——2018年総選挙と民族・地方」をもとに組まれたものである。なお、各章執筆後の2020年2月末から3月にかけてマレーシアで連立の組み換えによる政権交代が生じたが、それについては本特集の対象としていない。